

渋谷恵美子
遺文集

光照寺寺報「やすらぎ」掲載

「小さな窓から」

冠 頭 言

佐々木 玄吾

光照寺から『渋谷恵美子様の遺文集』を出版したいから、私に冠頭言を書いてほしいという依頼があった。そうして、光照寺寺報『やすらぎ』掲載の「小さな窓から」の原稿が送られてきた。

平成六年十二月の創刊号から平成二十年二月の第四十号まで、十四年間途絶えることなく連載されている。渋谷様の年令に換算すると、八十一才から九十四才までの十四年間である。

私はそこに、住職池田孝郎師と渋谷様との十四年に亘る信頼関係の深さを感じて熱いものが胸にこみ上げてくる。平成二十年四月二十二日に九十四才で還浄され、そのお通夜には、住職・坊守・副住職が参列され、葬儀は住職と副住職とで執行されたことを承り、ご遺族の光照寺に対する強い信頼を思う。

改めて創刊号から四十号までの遺文集を読み返してみると、円空仏 天災 脳移植 蔵王旅行
心霊現象 光照寺の御尊像 宗教冷戦 戦争未亡人 ダイアナとテレサ 仏説 ドナー申告者
ユーフォルビア 逆縁の話 義弟の死 少子化 三百年後の子孫 御飯の頂き方 敬語 遺伝子
組み替え お浄土から話しかける 人間臭さ 消化器全線ストライキ病 死と念仏 イタタ 火

星の話 漢字 最初の言葉 帰郷 孫の念仏 クリスマスイヴ おばあさんの宝物 子育て 叔母の言葉 メール 妹の孫 退院後の手記 夢を見た プレゼント ショートステイ等、多様な内容をあたたかい眼差しで客観的に書かれている。これが念仏の心というものであるろう。

その中でも特に心に残る文が二つある。

一つは、平成十六年十月の文である。この年渋谷さんは九十一才の筈である。

「先日遊びに来た五才の曾孫が積木を組立てながら『コーゲンギギ』と言っている。これは私が教えたのではない。けれど環境が伴わないと覚える言葉でもない。私は曾祖母の勤行で正信偈を覚えた。今その七代目の血の繋りが百五十四年の年令の差を超えて讚仏偈を口にしてある事で通じ合っているのを私の一生のうちに見ることができた。私は不思議で仕方がなかった。幸せとはこんなときのことなのだと思う」

もう一つは、平成二十年二月、四十号の文である。それは亡くなられる二か月前の文である。

「福祉の老人ホームで一週間位のショートステイで毎月お世話になっている。一寸高級な姥捨山である。私は友達がすぐ出来る気だったが、その様な人は大抵『時には家の者に楽をさせてあげよう』と思って来るの』と、間もなく帰ってしまう。言葉もなく動けない人達もいる。――中略――この一週間をもっと重く受け止めていかないと申し訳ないと思う事であった」

これが九十四才で亡くなられた渋谷さんの絶筆となった。

渋谷さんは八十一才から『やすらぎ誌』に執筆をはじめられた。毎号、毎号、やわらかで、前向きで、しかも知性あふれた文章は一つ一つ光っていた。私の家内なども待ちかねて読んでいた一人である。

先達として後を導く人であった。私はこのような遺文集の冠頭言を書かせて頂いたことに感謝している。

平成二十年六月二十五日

小さな窓から

円空仏展を観に行つた。写真ではよく見るがやはり違う。それによく集まつたと思うほど多い。ナタだけで彫つたとい



うのに、何てデリケートな表情が出ているのか。皆可愛らしいと思う。円空は、どんなにかめしい仁王様を彫ろうと思つても、どうしてもなごやかなお顔になつてしまふのだから。彫るのが楽しくて仕方がないといつた心が伝わつて来る。

仏教を偶像崇拜だと言う人達が居るけれど、仏の教えを色々な姿で衆生に伝えないでは居られないお方が、こんなにいるんだぞと彫り続けた。円空に限らず、多くの仏師達の心は、仏教を聞いてみないとわからない。偶像なんかではない。みんな私達のまわりで生きて働いている人達の象徴であり、肖像ではないか。

平成六年十二月十五日 創刊号

小さな窓から

地球は言つた。「私だつて宇宙の中の一つの生き物なのだよ。呼吸や運動をしななければ、私を頼りに生きている者達を



生かして行くことは出来ない。それが何時、何処で行な

われるかは私自身でも、どうすることもできない。真如の摂理に動かされているだけなのだ。人は私を自分の所有物と思う様になつて来ているのではないか。せめて戦争をしたり、自然を壊したりしない様にしてくれよ。自然がよく守られているところは、天災も起きにくいのだ。私は永劫の昔から新陳代謝を繰返して来た。それを人は天災と言うけれど、そのお陰でお前達はアメーバから人間にまで進化して来たのだから。つらいことだけど、天災は私自身にも、お前達生物にとつても宿業という外は無いのだよ」と。

平成七年四月十五日 第二号

小さな窓から

未だ人体実験の段階ではないけれど、外科学的には脳移植は可能なのだそうである。ところが脳死した人の体が、外から入つて来た脳に拒絶反応を起すという。その拒絶を起す意思はどこにあるのだろうか。すると人の心は脳にだけあるということが怪しくなつてしまう。脳を除去した蛙の背中に硝酸を浸した紙を貼ると、すぐ後脚で剥がしてしまうのを、反射運動と簡単に言っているけれど、果たしてそれだけの問題なのだろうか。脳移植がたとえ成功しても、私が百パーセント私で居られるものだろうか。



又生命もわずか数年か数十年延びるだけのことである。「仏法は身に受けるもの」との教えは、仏教が私達に課せられた、永遠の大きな問題ではなからうか。

平成七年八月十五日 第三号

小さな窓から



蔵王の紅葉は息を飲む程美しかった。

ガイドが皆に「蔵王は昔修験場として、女は入ることを許されませんでした。何故でしょう」と判り切ったことを尋ねた。私はわざとひねくれて「それは修験者が

女に気を取られて迷うからです」と答えた。ガイドは一寸困った顔をして「昔は女は穢れたものとされていたら、お山が穢れると思われたのです」と説明した。宿へ着いて部屋で寛いでいると、足の悪い老紳士が入って来て私の前に座り、「昼のことは、あなたの言われたことの方が正しいのです」と言っ、気が済んだように、すぐ部屋を出て行った。この人は身障者の人達に仏教誌を定期的に自費出版している人と後で聞いた。旅は素晴らしい人との出会いがある。

平成八年二月十五日 第四号

小さな窓から



テレビや週刊誌などでやたらに霊だ魂だ心霊現象だと騒いでいる案外若い者に人気があるらしい。霊も魂も絶対無い、とヒステリックに言い切る人にも私は余り好感を持つことは出来ないが、残念ながら私にはその様な体験は無い。私の曾祖母は1845年に、魍魎魍魎のウヨウヨしている片田舎で生まれ、参勤交代の行列も見たと言う、江戸時代から昭和の初期まで行き通した人だったが、彼女は「そんなもんはなんぼ居つてもかまわん、お念仏のある家には悪さはようせんもんじゃない。御開山さまがちゃんと言うてござらっしゃる」と泰然としていたものである。近代の若者の方がよほど変なものに迷わされている。曾祖母は無学ではあったが、本当の知恵者だったと思う。

平成八年六月十五日 第五号

小さな窓から

阿彌陀仏像を作るのはまさに難事業である。それは四十八願を成就され、三十二相の備わった、人を超えた人でなくて



はならないからだ。それを石川恵観師は為し遂げられた。

光照寺の新本堂に安置されたご本尊の、光顔巍巍の御尊像。有縁無縁も思わず手を合わさずには居られない。師は『心と体のコンデイションの良い日でないとお顔に鑿（のみ）を当てるようなことは致しません」とおっしゃって居られた。仏師松本明慶氏の言葉に「自分の作った仏像もいったん納めたら、手で触ることも出来ない尊い存在となつて合掌してしまふ。技術の未熟な所も年を経るにしたがつて変わってくる」とある。恵観師も同じお心であることと思う。本当に善き仏師を選ばれたものである。

平成八年十月一日 第六号

小さな窓から

テレビを見ていたら、人気漫才のコンビが若い頃の恩人のお墓参りして「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と拝みかけ「ア、ここは浄土真宗だったんだね。南無阿弥陀仏南



無阿弥陀仏」と言い換えた。見ていて微笑ましい。実家の近くのT住職は町内会長でもある。

「私は八幡様のお祭りには法衣を着たままで社殿の入り口に座つて奉納金の受付をするんじや ワツハツハ」と笑つていられた。この拘りの無さおおらかさ。仏法では「鬼神を祇ることを得ざれ」と教えられる一方「三乗の

法を誇らず」と厳しく戒めてある。この頃自分の宗教で無かつたら絶対に合掌しない人達が多くなつてきた。かつての日本人はそんな狭い心は持つていなかった。どうぞ宗教冷戦が起こりませんように。

平成九年二月十五日 第七号

小さな窓から



Kさんは戦争未亡人である。戦後、子供を抱えてどんなに働いても食べるか食べられないかのような日が続いた。Kさんは孤児であった。親代わりとなつて育ててくれた人が亡くなられたと聞いても、お葬式に行く事も出来なかつた。

それがKさんの心から五十年経つても離れない。「私は死んでお浄土へ参りましたら、一番に先生にお会いしてそれをおわびしようと思つています」死んだ後にお浄土と言う所が本当にあるのか、そこで先生に確かに遇えるのか、そんなことはKさんには問題ではなかつた。自分を許せない気持ちは、お浄土で謝ると言う願いしか今を支えて呉れる方法は無いのである。私はこのKさんの気持ちは素直に尊重したい。

平成九年六月十五日 第八号

小さな窓から

位人身くらいじんしんを極めそこには幸福を見出せず、新しい幸せを求めて逃避たいひという



道を選んだプリンセス・ダイアナと、十八才の若さで社会の底辺に身を投じて恵まれない人達の幸せを願ひ、一生を貫いたマザー・テレサと、両極端の境涯にあつて共に全世界の注目の的となつていた二人の女性が、相前後してこの世から旅立つて行つた。ダイアナとテレサは親交があつたと伝えられるが、果してどの様な親交か。テレサは救済には精神と物が揃わないと出来ない、経済的にも逞しさを示していた。テレサはこの世での自分の体力の限界を知つて、ダイアナに真の幸せとは何かを知らせる為に急いで後を追つたのだらうか。天国で、どちらの星が美しく輝いていることだらう。

平成九年十月十五日 第九号

小さな窓から

カール・セーガンがダライ・ラマに『科学が発達して仏教の教えと相反するようになった時、仏教はどうしますか』と尋ねたらダライ・ラマは『仏教にとつて、そんな



ことは何でもありません。教典になんと書いて有らう

とも、現実のほうが事実なのです』と答えている。少なくも、浄土真宗は違ふと思う。学問は学者の独断で決まることが多い。その時絶対事実として社会に認められても、又違ふ学者に覆されると言うことは珍しくない。宗教がその度社会に迎合していたらどうなると言うのだから。『仏説経』は一字として消すものが無く一字として書き加えるものが無い。と教えられているが、ラマ教は、本当に仏教なのですか。教典は仏説なのですか。

平成十年二月十五日 第十号

小さな窓から

実家の隣の菊ちゃんが五十才台の若さで倒れた。幾本もの管を取り付けられたまま、身動きもせず、ただ機械的な呼吸をしている。



『菊ちゃん私よ、判る？』と妹が声を掛けた。看護婦が『脳死状態ですからもう何も判りませんよ』と言うのも構わず妹は話し続けた。すると菊ちゃんの目尻から涙がツツと流れた。『菊ちゃんが泣いている、判るのね、判るのね』妹も泣きながら、彼女の涙を拭いた。若し彼女がドナー申告者だったら『今スイッチを切らないで、私未だ生きてるのよ』と言いたくてもどうすることも出来ない、とフト思う。死を目前にした人の命と、一刻も

早い臓器の提供を待っている人の命と、生命の尊厳と云うことについて複雑な時代が来たものである。

平成十年六月二十五日 第十一号

小さな窓から



生物実験で、一個の細胞を分裂させると膨大な数になった時、突然繁殖を止めて自然消滅してしまう。化石で調べるとピテカントロプスもネアンデルタールもクロマニヨンも、それぞれある時代に忽然として消えたと言う。同種繁殖の宿命なのか。ホモサピエンスは永遠だと、誰が断言出来るだろう。何万年もの間、同じDNAを持った人同士が血族結婚を続けて来ているようなものだ。一部の学者はクロール人間を早く作りたくてムズムズしている。お止しなさい、細胞分裂と似たような事では無いのですか。その人達は人の命を人が自由に出来ると思っっている。自然に逆らった究極の時、人類の終わりが来るのではないか。そんな気がする『人身受け難し』改めてこの言葉が重く身に染みる。

平成十年十月十五日 第十二号

小さな窓から

アフリカのある地方に、ユーフォルビアと言うサボテン科の植物が有る。臭い匂いと、持っている毒は他の生物を寄せ付けけない。人の体に触れると、かぶれたり癌になったりする。枯れてしまった後の土地も毒性は長く消えないと言う。幹を中心に、その大小に応じて円形に、草一本生えていない。「アツ伊蘭だ」と思った。涅槃経に出ている伊蘭に違い無いかしら。何と呼ばれて居るのだろうか。経文では、毒の植物まで仏法の種となる。方便として譬え話が多いものと思っていたが、ユーフォルビアなどが出てくると驚きであり興味が沸く。お経はこのようなことから、多方面の勉強をさせて下さるものと楽しくなってきた。

平成十一年二月十五日 第十三号

小さな窓から

ある讚嘆会するとき、逆縁の話が出た。そばにいた男の人が「子供に先立たれた人は、その子が親に念仏を聞いてくれとの催促だ」という。私は「そんなこと第三者が言うのは残酷でしょ



う。我が子の死を縁として仏法の喜びを知ることが出来た時、その親から初めて出る言葉ではないですか」と言った。その人は翌日になつても未だ納得いかない様子だった。近所に住むクリスチャンにその話をしたら「私達にもその様な事があるんですよ」と話してくれた。不治の床にいる人を見舞つた人が「あなたは神に愛されています。神に委ねなさい」と言つたら「私はその様な神には愛されたくない」と顔を背けたとのこと。真心から出た言葉でも、使いようで相手を傷付ける刃物となる。

平成十一年六月一日 第十四号

小さな窓から

今春、義弟が逝つた。私は臨終に会えなかつた。妹が電話で「お棺にはどのようにして上げたらいの」と言つてきた。「喪主なのだからあなたの気の済むように」と答えた。私が行つたとき、義弟は楽そうな浴衣を着せられて一張羅の背広が掛けられていた。横に杖が入れてある。「足が弱つて杖を欲しが



つていたの」と妹が言つた。私の娘が、酒瓶の口をゆるめて顔の側にそつと入れた。私の曾祖母は遺言で「五十三段ひと跳びに阿弥陀様の所に行くのだから長い着物を着せてくれ。その他は何もいらぬ」と言つていた。あ

る女性記者が、母の葬式に遺族の意見も聞かず、周りのものが仕来りたるの死装束にしてしまつたと、新聞に憤慨して書いていた。どちらが良いのか私は知らない。

平成十一年十月一日 第十五号

小さな窓から

今、少子化と老人過剰が問題となつている。親達は少し産んで幼児から教育し、エリートコースを歩ませようと必至である。答えはもう現実となつて、工場等は若者の労働力不足で外国から大勢の人が入つて来る。どんなに貧しくても子は授かり物と生まれるだけは産んだ子等は、戦争まで体験させられ、曲がりなりにも今の日本をここまで育て上げた。日本中に居たと言われるアイヌ人が、ヤマト人に北海道へ完全に追いやられてまだ千年経たないそうである。今に日本人の純血？を頑固に守ろうとすると、

どこかの山の中で「木曾のナー」と踊っている人達を見て「あれがヤマト人の踊りです」と見物している。その日本人は一体何系の民族なのだろうかと考へてしまふ。

平成十二年二月十五日 第十六号



小さな窓から

彫刻家 故平櫛田中は九十九才の時、五十年分の彫刻用の木材を買い込んで世間を驚かした。久保田一竹氏は、辻



が花という桃山時代に生まれ、江戸時代に友禅染めに押されて消えて終った、今では幻の染め物と言われる見事に魅せられて、生涯をその復元に掛けている。振袖八十枚が目標で、並べると四季風景の一服の絵画になる。2000年の春、八十二才で、半数に至っていない。天才は残りの寿命にこだわらない。こだわると芸術は行き詰まる。一竹氏は自分の作品が三百年後にどの様に美しく古びるか見たいものだと言う。私も明日の日は如来におまかせして、今日を大切に、そして三百年後の子孫が平和にお念仏申せる世代でありますようにと、それだけ願って生きたい。

平成十二年六月十五日 第十七号

小さな窓から

ある小学校で一人の先生が、食事の前後の感謝の言葉は宗教の押し売りだから



よそうと言いついて取りやめになった。たいした問題で

ないからと反対する先生もいなかったのか。そんな軽い

問題なのだろうか、御飯をいただくとき何に感謝するかは、学問や宗教を論じる以前の問題ではないのか。感謝の意味も教えられない先生が巾を利かすような学校には行かせたくないものだ。いじめや、少年犯罪と結びつけたくなる。事件が起きてあわてて職員会議をするより、生徒の行事を決めることにもっと慎重で有って欲しい。同じ頃、テレビで小学生に料理を教えている人が「魚や肉や野菜の皆生き物の命をいただいているのだから無駄のないようにしましょうね」と言っているのは印象的だった。

平成十二年十月十五日 第十八号

小さな窓から

日本は神代の昔から、敬語と言うものが存在している。大きく変化して来たけ



れど、敬語が有るので日本語は美しい、と思っていた。今、初歩的な敬語も使わない若者が増えて来たと思った。両陛下が御休憩をとられた民家の中年の主婦が「出したものはみんな食べてくれました」と言っているのが驚いた。これでは犬に餌をやったのと同じ扱いだ。所がこの頃は「犬に御飯を上げる、植木に水を上げる」ので

ある。新聞に敬語を使わなくなったのを切っ掛けに、敬語と謙讓語がアヤフヤな時代が来た。学校教育もそんなことには無関心らしい。敬語がいらないなら謙讓語もいらない。時代外れと笑われないうちに「戴きます」を止めて「食べます」と言うことにしようか。

平成十三年二月十五日 第十九号

小さな窓から

遺伝子を操ると言う言葉が出来た。人の胎内に入れるこ



とは法律は禁じているが、研究は自由である。虫の遺伝子を組み込んだ猿が生まれて、遺伝子はどこからでも貰えると言うことが証明された。研究室は密室である。何時どんなことが起きても不思議ではない。病的なDNAを取り替えると言う事は既に始まっている。研究室は工場に成る。今に注文に応じた遺伝子の寄せ集めの優秀な人間を造り上げるか判らない。それを望む女性も出てくるだろう。アメリカでは州によっては結婚しないで精子を貰って母になる事が許可されて、そうした子供が増えてきていると言う。研究の材料に不足はない。さて優秀な人間とはどんなものを言うのであろうか。考えていると少し背筋が寒くなってきた。

平成十三年六月三十日 第二十号

小さな窓から

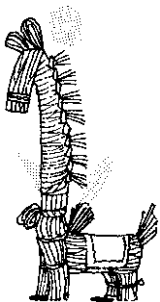
善き師であり法友であった人が逝去されて、頼まれた追悼文

の終わりに「お浄土ではこれから又忙しくなりますね、私も参りましたら、あの美味しいお茶を御馳走して下さい。」などと書いた。友人が電話してきた。「あなた良い事書いてくれたわね。私あれを読んで何だか死ぬのが怖くなくなったわ、かえって楽しくなった。考えるとあちらの方が知人が多いんだものね」考えるのは自由なのだ。「善き人の仰せ」を信じて生きてきた。それなら死ぬのも何を信じて死ぬのかは、人それぞれの問題である。お浄土は肉眼で見ることができないが、願いの中で観ることはできる。「安らかに眠りなにかしないよ。何時も話し掛けているからね」と子供達には言っているのだが、伝わってくれているだろうか。

平成十三年十月十五日 第二十一号

小さな窓から

いつもの様に光照寺の石段を上る。玄關に入るまでもなく線香の良い香りが



「ようこそいらっしゃいました」と言わないばかりに漂

って来る。香りというの良い匂いを連想するが、においとくと複雑になる。此の頃やたらに消臭剤が出て我家にもそれぞれの場所に色々置いてある。くさいのは嫌だ。けれど臭いのは悪いことなのだろうか、皆必要あって個性のある臭いを持たせてあるのではないのか。良い匂いだけの世の中になったら或は生命の危険にも気が付かないということもあり得る。行い済して欠点の無い様な人がいると警戒心が起きて親しみにくい。人は矢張り人間臭さを残した様な人が好きだ。如来は人間臭さを消せなど何処にも仰言ってはいない。

平成十四年二月十五日 第二十二号

小さな窓から

突然、唾液も出ない。ご飯どころか水一滴喉を通らない。無理に飲み込むと食べたまま素通りする。三人の医者



にかかったが「異常なし、元気を出して食べなさい」と割りに冷たい。それが出来ないから医者に行ったのだ。家の者も元気を出せと言う。「来る時が来た、これ以上ジタバタしないぞ」と横になっていた。ふと思いついて札幌で医者になっている甥に電話をしたら「心配することないよ、今は食欲だの栄養だの考えないで水だけ欠かさず飲んでいなさい」と割りにのんびりした声である。

神経がスーッと一本抜けた様な気がして水だけは飲めた。「いささかの所労のこともあれば」のお言葉が身に沁みた数日であった。自分で病名を「消化器全線ストライキ病」と名付けた。

平成十四年七月一日 第二十三号

小さな窓から

娘の家に、見るからに不器量な仔犬が迷い込んだのを縁に飼いはじめて十数年、今は目



も耳も利かず歩くのもおぼつかない。獣医は見兼ねてか、それとなく安楽死をほのめかすが、家族はみんな自然死を望んでいる。「手間も費用も人間と同じなのよ」と娘は言う。そうした矢先に知人の息子が自死した。裕福な家庭両親の寵愛。就職も決って卒業を待つばかり。何が原因か誰にも判らない。彼の父が「住職が、念仏を申せばお浄土に行かれると仰言たけれど、そうだったら良いのね。」という。私は「それがただの慰めの方便だったら、仏教はとくに消滅していたでしょう。今、それよりほかに頼れる言葉があるかしら」と言っただけれど、私は今まで生命の尊厳と軽々しく言っていたようだ。これほど真剣に考えた事は無かったような気がする。

平成十四年十月十五日 第二十四号

小さな窓から

新年早々寝正月になってしまった。家の中で転んで背骨の一部が

欠けたのである。大げがではないけれど何しろ四六時中痛むので、痛い痛いと言うまいとしても出てしまう。人は小指の先の小さな傷でも全身が振り廻される。それが背骨だから少し動いても体中痛い。私は考えた。「イタ、」の代りに、「ナンマンダブ」ということにしよう。早速同朋のOさんに電話をしたら「アハハそりゃ無理だよ、イタタの代りにお念仏が出る様に人の体は出来ていないの、もし出来ても家の人が、ついに頭に来たかと面喰うからよしなさい」と言う。何くそと実行にかかったが駄目だった。かくして私はおとなしく、世話になり乍ら「イタ、イタ、」の毎日を過している次第でございます。

平成十五年二月十五日 第二十五号

小さな窓から

火星の地下に埋蔵されている二酸化炭素を化学的に処理すると生物を生かす水

と空気は充分作れる。火星を第二の地球として人間や生物の種を送り込むということを研究している学者達がい



るといふ。ところが環境の違う星では進化の法則から我々とは丸で違った子孫が生れて来ることになる。人はとんでもないことを思いつきそれを実現して来たから可能かも知れないが、これは自然法爾じねんほうににおまかせした方が良さそう。宇宙には無数の地球が生れ、生物が文明を築き上げては滅びをくり返しているに違いない。人間が作り上げた火星世界も地球が亡びると同時に消えて行く宿命では無かろうか。学者さん達よ、それだけの学力と智力を現在の地球の浄化に使って頂くわけにはいきませんか。

平成十五年七月十日 第二十六号

小さな窓から

漢字はすごい。一字一字がひとつの意味を持っている。世界に例がないという。日本は漢字

をそっくり頂いて、略字、片仮名、平仮名を作り、話し言葉で表現すると言う素晴らしい文字文明を作り上げた。その間中国が頑なに漢字を守り続けたのは日中交流にとって有難い事だった。文化革命という時代が新しい文字を作り出して途端に中国文字は日本から遠ざかってしまった。中国に言わすと「そちらが分家でしょう、現在の中国文字に変えなさい」と言うかも知れないが今更そう

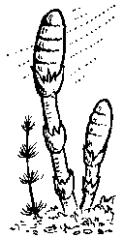


はいかない。文化革命は中国が最も日本を蔑視していた時代だったから意地でも日本の略字など使いたくなくなったのかも知れない。古い漢字の読めない中国人が増えてくるだろうな残念なことだ。

平成十五年十月十五日 第二十七号

小さな窓から

何万年前のことか、地球上の人間が一齐に自分達が生かされている



る大いなるものに目覚めた。ある地方の人達は「ナム」と声を出した。又ある地方では「アーメン」と言い「オー」や「アラー」と言った、喜びのあまり頭に鳥の羽根をつけて「ホッホッ」と踊りまわった人達もいた、両手を差し上げたり地にひれ伏したりそれぞれ感激の心を態度で示した。言葉や動作は違っていても皆心は一つだったのだ。

其れまで他の動物と余り違わない鳴き声で意思の表現をしていた人達の言葉のはじまりである。これから爆発的に言葉は増えて行った。けれど人間はその最初の言葉は誰も永久に忘れることは無かった。

こんなことを勝手に考えているとやっぱり人間でいて良かったなあとしみじみ思う。

平成十六年三月一日 第二十八号

小さな窓から

私がこれ以上ボケない内にと、娘二人に妹と四人で広島県の故郷に行く事になった。



車椅子での旅は初めてで帰るまでに何人の鉄道員やその他の人の御世話になった事か、設備は駅によって違うが心のこもった扱いにはただ頭が下がる。乗換えの度に次の列車に乗せるまで一人を運ぶためにどれだけ手がかかるか身を以って痛感できた。

すぐ始まる連休には何人もの人をどんなにしてさばくのか、私などお国の保護と言って甘えていたら車椅子にも乗れなくなったら担架で運ぶ旅もさせてくれと言い出すかも解らない。旅は楽しかったし、お墓参りも出来た。けれど暫らくはおとなしくしてもっと考えてみようと思う。御世話になった方々、本当に有り難うございました。

平成十六年七月十日 第二十九号

小さな窓から

孫ののろけをやたらに口にして嫌われる事がある。同じ事が宗教に付いても言える。こちらは嬉し



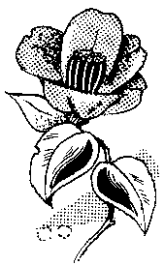
くて夢中で喋っていても相手は又かと素っ気無い顔であ

る。通じる相手を持つことは幸せな事なのだ。先日遊びに来た五才の曾孫が積み木を組立てながら「コーゲンギ」と言っている。これは私が教えたのではない。けれど環境が伴わないと覚える言葉でも無い。私は曾祖母の勤行で正信偈を覚えた。今その七代目の血の繋がりが百五十四年の年齢の差を超えて讃佛偈を口に行っている事で通じ合っているのを私の一生のうちに見ることができた。私は不思議で仕方がなかった。幸せとはこんなときのことなのだと思う。今日はちょっと曾孫の事を言わせて頂きました。

平成十六年十月二十五日 第三十号

小さな窓から

クリスマススイヴの招待を受けて行った。一応飾りも出来て、形は整ってはいるが、お祈りの言葉も



出ないし、賛美歌を歌うでも無し、主催者達が松ケンサンバを踊って見せたりみんなで歌謡曲をコーラスしたり御馳走やケーキを頂いて楽しく時を過ごした。閉会の挨拶は「私はクリスマスチャンではありませんがすべての人の幸せを願ってこの世に生まれて下さった人があるということをお忘れなために、年に一度のこんな行事を持つのも意義があるのではないかと集まって頂きました」とい

うことだった。花祭りはもうすぐ来る。一年に一番美しい季節にお生まれになったお釈迦さま。花祭りをもっと日本中の子供達まで楽しんで待つようなものになったら良いなと思った事であった。

平成十七年三月十五日 第三十一号

小さな窓から

あるおばあさんが、小学生の孫息子の部屋が汚いので片付けてやりました。いつか、



木の葉についた卵がかえって、毛虫が一ぱい這っていてお母さんが悲鳴を上げた引出しには、石ころや貝殻がゴロゴロしています。きれいになった所に帰って来た孫はトタンに「おばあちゃんのバカ、僕の宝物をみんな捨てた、今度はおばあちゃんの宝物を捨ててやる」と怒っています。「あれは宝物だったのかいごめんね、それにしてもおばあちゃんには宝物なんか持っていないよ。」「嘘だア布の袋に入れてある本が宝物だろ。」おばあちゃんはハツとしました。聖典です。「私にとつて聖典は掛け替えのない宝物だったので。それを孫が教えて呉れました」と、そのおばあさんはしみじみと話していました。

平成十七年七月二十二日 第三十二号

小さな窓から

孫娘の家に家族連れで赤ん坊を見に行く。度々という訳にはいかないが、一人っ子同



志結婚後十数年子供に恵まれず、みんなあきらめていたところに、授かった女の子である。時どきは顔が見たい。生後三ヶ月半とは見えない程の成長ぶりで一安心「今日で六日お通じがないのよ、飲んだだけみんな身になるのかしら」と案外呑気な顔なので驚いてしまう「だって保健婦さんが何日も出ないって騒ぐ必要はないと言った。」「それにも限度があるよ今日出なかったら明朝医者に行くこと」と厳しく言って原始的な按摩を始める。歌に合せて「の」の字に揉んでいるとキヤツキヤツと大機嫌である。夕方近くに真赤な顔で「ウーン」と言ったかと思ったら「出たよーぱい」とママが歓声を挙げる。時代が代ると子育ても変る。同居している訳でもないのに、育児などに、大正生れの婆さんが、いらぬおせっかいは絶対にしなれど今日も車の中で腹をきめて来たのに、来たトタンにこんなことになった。帰りの車では、新米のおじいちゃんがポツンとひとり言の様に「年寄りが居てきょうだいがいてワイワイする中で育つのが本当の家庭というものなんだろうな」と言っていた。

平成十七年十月二十日 第三十三号

小さな窓から

母の妹は、娘時代の数年を私の家で家事やお稽古事に通ったりして私はとても可愛がられ幸



せでした。聞法には熱心で近くのお寺や信者の方の家にいそいそと聞きに行っていました。間もなく結婚しましたが手紙もみんな両親が先に開封されて、持っていた本やノート類を読み返すだけでした。体も随分無理をして二人の子供を残して若くて亡くなってしまいました。私が最後に聞いた言葉は「仏法は私の生きる為の力となつて下さるけれど結局死ぬ為の支えにはなつて下さらなかつた」でした。当時の私はなんと返事をして良いのか、ただ黙って一緒に涙を流すだけでした。叔母は亡くなつてからもいつも「それで良いのか」と問い掛けてきます。私にとっては往相還相の仏様なのです。

平成十八年二月二十二日 第三十四号

小さな窓から

二人の自分の子を同じ様に扱って大きくなつたのに、まるで違つた性格に育っている。幼児教育と



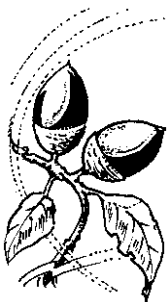
は何をする事か私にはよく解らない。私は弟の子を3人

とも生まれてすぐからまかされた。自由奔放にただ可愛がって世話をした。みんな良い子に大きくなってくれた。さて一時代過ぎるとお金を掛けないと一人前になれないような事を言う時代が来ている。少子化時代の始まりである。祖父母の心得の本まで送ってきた。すると私が姪を育てている頃ママさんはどんなハラハラした気分で我慢していたであろうと今更心配になってきた。姪にメールで「ハチャメチャな育て方をしてごめんね」と打ったら即返事が来た。「私は伯母ちゃんにされたことと同じことをして子育てをしました、心配御無用」

平成十八年六月三十日 第三十五号

小さな窓から

妹の孫、桃子から電話が掛かってきた、小学校一年生。「モシモシおばあちゃん只今ア」あら



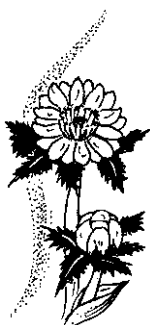
今帰ったの、学校は楽しい？お友達沢山出来たでしょう」「ウン一杯出来たよ、でも一人だけ出来ないの、病院に通っている」「病気なのね、可哀想に」「ウン病気でないの可哀想ではないの」一寸話がややこしい。精神的な問題でもある子なのかな。「あのね、そんな子供でも可哀想というものなのよ」「ウン」今其の事を理解させるのは無理である。けれど桃子の社会も広がってき

て色々の人たちと逃げただけは居られない、どのように対応して行くか問題になってくる時が必ず来る。そうした業を背負った人たちとも区別無しに溶け合って行けるような人になって欲しいなと願わないではいられない。

平成十八年十月一日 第三十六号

小さな窓から

2007年1月4日昼食前
トイレの前で倒れる。「救急車はいやだ」というのを無理



やりA病院に運ばれる。原因は判っている。貧血、食欲不振、脱水によるめまいである。

兎に角一週間で退院。めまいは相変わらずだが寝起きが少し楽になっている。足は水攻めでお餅をくっ付けたように腫れあがって入院中は治療はしてくれない。「これは入院の理由になりませんから外来として改めて治療をうけてください」と、水攻めで原因を作っておきながら帰るときに小さい錠剤を2つぶくれたのみ。1週間刺し放しの針を抜いた後に張ってあるテープを別のナースが何を思ったかすぐはがしてしまう。出血に気が付いたときはふともパジャマも血だらけ。入院初日から「便秘ですから薬を下さい、浣腸してください」と頼むのに「ハイ」といって、晩に飲まされる1錠の薬の中に睡眠

薬、便秘薬、食欲増進剤もみんな入っていますと1粒だけくれた薬は、「ハイ口開けてアーンハイお水」で済まず。絶対にこちらの自由にはならない。

ソロソロ普通の病人室とは違っている事に気が付き始める。見舞いに来た娘に話すと普通だという。テレビは2台付けてあるのに部屋にはテレビがないという。どんなに説明してもないといって聞かない。

6日目我慢が出来ないので「もう死んでも良い」と3時間汗と涙でがんばってやつと指の先くらの便とおならが出て、トイレの出口にいた男の看護師とけんかをしてしまう。今度こそ医者冷酷を感じた事はない。「便秘ですといったら一応処置して後は自然に出す法を教えると言うのが順序ではないの」とか。

退院の時は持つて行った便もみんなおなかにいれたままお持ち帰りである。退院ボケというか、まだ頭がボーッとして話すことはばかばかしくてみんな相手にしてくれない。娘が「内ではいいけれど、人には話さないでね」というので約束する。何も知らないはずのある法友から電話があつて、久し振りに人間の言葉に出会ったような気がした。いつも喧嘩ばかりして絶交されたと思っていたのにケロリとしている「私絶交だと思っていたのに」「わたし絶交なんかしていないよ」勿論お念仏以外の話はない。

恐怖心というかこのメールも今度開いたら無かったと

言う事もあるような気がする。何かに憑かれている。これだけ打つのに今までの3倍5倍かかったもの。

これが退院後の初めての手記です。

平成十九年二月十五日 第三十七号

小さな窓から

入院中の嫌な思いに出会った事を話したら病中の妄想だと相手にされない。天井に終日水滴



の音が響く、頼んでも見に来ない。「あのくらの音ならすぐ慣れるよ」4か月たつても慣れない。四面楚歌である。娘はよくテレビを見ながら「わァーホームラン」と奇声を発する。一度鬱療法に真似てみたい。夢を見た私の生涯に出逢った人達全員集つてお祭りをしてる。花車の采配を振っている西岡さんが私に声をかける。「この世は嬉しいね、このまんまで私の世界なのだから、皆死んでも誰もいなくならない、そのまんまなんだから嬉しいね」踊りながら行過ぎる。翌朝水漏れの検査に来ると電話があつた、続いて同い年の叔母の死の報が入る。夢は私に何を知らせようとするのか。ホームランはまだ叫ばない。

平成十九年六月三十日 第三十八号

小さな窓から

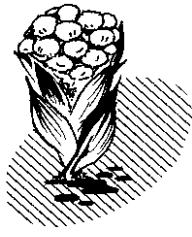
妹の家に男の子が生まれたとき、ご褒美にと言って、0のついた金額の銀行通帳をお嫁さんにプレゼント

した。我が家とはすべて桁が違う。我が家の主婦も70歳近くで初めて孫に恵まれて舞い上がっている。何年来溜めた貯金箱を、ジャラジャラではなくガラガラとふりだしている。「思ったよりたくさん有った」と結構ご機嫌である。勿論0なんてついていない。妹の家は恵まれている、その幸せ振りをメールでユーモラスに送ってくるのを私は楽しみに待つ。息子の家庭サービスも中々良いツイ「そのようなおやじは出世は遅いけどね」と言ってしまった、当メールが途絶えた。腹の底まで理解している相手だと思っても矢張り言葉には気を付けようなど痛感したことである。



小さな窓から

福祉の老人ホームで一週間くらのシヨートステイで毎月お世話になっている。一寸高級な姥捨山



平成十九年十月一日 第三十九号

である。私は友達がすぐ出来る気であったがその様な人は大抵「時には家の者に楽をさせてあげようと思ってくるの」と間もなく帰ってしまう。言葉も無く自分のことは何も出来ない動けない人達もいる。係りの人はこの人達に少しでも沢山食べてもらおうと気の毒なほど苦心する。動けないままバランスのいい栄養のおかげでみんな内臓は健康である。その人達は私に声無き声で「あなたもこの中の誰かにならないという約束は出来ませんよ」と言う。楽しい行事にも参加出来ない人達の為にも、この一週間をもっと重く受け止めていかないと申し訳ないと思う事であった。

平成二十年二月十五日 第四十号

私の信仰告白

渋谷 惠美子

私は広島県福山市で生まれ、一生のほとんどを過ごしました。私の母方の曾祖母は、福山に程近い田舎に、八十八才まで生きていました。私はこの曾祖母が大好きで、幼い頃は行く度にひいばあちゃんの自作のおとぎ話を聞くのが一番の楽しみでした。浦島太郎の竜宮は絵本と違ってお浄土でした。玉手箱からは煙と一緒にお経が出てきました。巡礼お鶴はご詠歌でなく、ご和讃を唱えながら歩きました。法蔵菩薩が四十八願を建てられて、その一番目がムサンマクシユの願で、十八願で悪人も皆救われるのだ。法蔵様が四十八願を遂げられて阿弥陀様に成られるまでに五劫と言う長い年がかかったなど、自分の作った話の中に幼い子供には難しい言葉を入れながら話してくれました。未だ幼稚園位の子が「無三悪趣の願」などの言葉を知っていたなんて今思うと、私に掛けられていた願いが痛いほど伝わってくるのです。

何の事が判らないなりに聞いた、これが大経の話だったのだと知ったのはこれからずっと後のことでした。思えば私の人生での最初の善知識はこのおばあちゃんだったのです。

住岡夜見先生にお目に掛かったのは十五才のころでした。祖母や叔母について行き、お話を聞いていたものですが、先生には可愛がられました。それでも皆さんが涙を流しながらお念仏を有難がっているのがさっぱり理解できなくて、素質が無いのではないかと思ったりしました。十八願の抑止門が

邪魔をしてどうにも困ったものです。なぜあのようなものがくつついているのだ、悪人成仏とは約束が違うじゃないか、と勝手な理屈を付けていたものです。

夜見先生が余りに若くしてお浄土にお帰りになられたことは本当にショックでした。それまでぼんやりしていた私が悔やまれて申し訳ない思いで一杯でした。その様なある時、夜見先生のお弟子の先生が、今まで余り気を付けて聞いていなかった十九・二十願のお話を時間を掛けて話して下さいました。このときの驚きは忘れることができません。雑行雑修では救われないと、そっちのけにしていた私は何て馬鹿だったのか、私は十九・二十願にも寄り付きも出来ないような存在ではないか、何が十八願どころか。その日は一日悲しいのか嬉しいのか涙ばかり出て困りました。それから気が付くと何と私は善き師善き友に取り囲まれているのです。皆一人一人が本気で私の事を気遣っていて下さっていた諸佛でした。十数年前に御恩ある人々と別れてこの地に参り心細い思いをしました。が佐々木玄吾先生ご夫妻のお導きで善師善友に恵まれるのはすぐでした。池田師の愚庵を通してまた、御同朋が増えました。善縁悪縁、全て私を導くための如来の御計らいなのでした。お念仏のあるところ孤独は無い事を信じて、感謝と憶念の日々を過ごさせて戴いて居ります。

渋谷さんは土徳の厚い福山市に生まれ、住岡夜見先生との邂逅の後、善師善友に支えられ、積極的開法をされる先頭第一の方です。

あとがき

渋谷恵美子様が還浄された。今、万感の憶いが去来する。人間の出遇いの不思議さに遠い宿縁の催しに促されていると感ずる。

世界中の仏教徒が出遇う時の挨拶が「今生に於てこの様にして、靈鷲山会の聴衆が又、お遇いすることが出来ました。」と言うという。

正しく、渋谷さんとの出遇いはその様に表現せざるをえないと思うのです。憶えば、私が東京の日野の公民館、佐々木玄吾先生のお宅の会座で、細川巖先生の聴衆の一人として集う中に渋谷さんはおられた。渋谷さんとは同じ埼玉の地の住人であったので、時として私の車に会座の帰り同乗して下さったこともあった。

渋谷さんは讃嘆の名人であられた。「今日のお話し良かったわね」と言って具体的法話の内容を自分の身に受け止めて、自分自身に言いあてて、自分のために法が説かれていたと讃嘆される。誠に法は「私、一人のためにお釈迦様が説法されている」と聞く姿勢が出来ておられた。「本当ね！」とまず感動の言葉から讃嘆される。この感受性の鋭さ、そして、受け止め方、そして、その表現力の豊かさにいつも感心した。発信と受信の呼応の鋭敏さに、私は何故かとふと疑問をい

だして、「そうであったのか!」と思うことしばしばであった。それは渋谷さんは常に問いを持っておられて、自身で推求されておられて、そして、聴聞されると自ら音叉の様に共鳴して感動して、感動の言葉が法を讃嘆する言葉としてほとばしるのではないかと思つたのです。

渋谷さんは広島県福山のご出身で、熱心な安芸門徒の宿善と土徳に恵まれており、ご両親等の信仰の篤い環境に生まれ、持ち前の感受性の豊かさによって、知性と情熱と真実、真理を推求する淳心が人格を形成し、困難な人生を心豊かに凌ぎ、貴婦人の装いを失わなかつた。人生の闇路は決して平坦なものでなく、思い描く理想とは遠く隔たつたものであり、ある時はまろび、ある時は立ち止まり、ある時はいさみ歩み続けて来たものです。私は渋谷さんの人生の歩みの困難を超えさせ歩ませたのは、如来、聖人と同行二人であつたと思う。であるが故えに、あの讃嘆が出来るのだと頷く。そうでなければあの「まこと!」と頷く了解の讃嘆は出来得ないことです。

渋谷さんは、まさしく靈鷲山会の聴衆のお一人であられた。そして、多くの聴衆と再会され、今ここに本国に還歸された。

渋谷さん「有難うご座居ました」。又、浄土でお遇い致しましょう。南無阿弥陀仏。

ここに光照寺の寺報「やすらぎ」に創刊号より連載して執筆して下さいました、「小さな窓から」を「渋谷恵美子 遺文集」としてここに出版出来ますことは、渋谷さんより賜りましたご恩徳の顕彰といたしたく、永く後世へととどめたく願ひ著わしたものです。

既に「やすらぎ」でお読みの方の中には毎号、洪谷さんの「小さな窓から」を楽しみにしておられた方々も多くおられました。又、この「遺文集」を機縁に、洪谷さんに遇って頂きたいと念願するものです。

この題の「小さな窓から」は具体的に「小さな窓」であったのです。それは、洪谷さんが入院され、退院された時、副住職と二人で洪谷さんの自室に招かれ、入院中の出来事を拝聴した時、ベットと小さな机にパソコンが置かれ、そのパソコンでご自身で文章を書かれていたのです。九十才を過ぎてもパソコンを操作する柔軟な明晰な頭脳、そして、緻密な表現力、観察力、そして、ゆるぎのない信仰の確信。その自室の南側の窓が「小さな窓」だったのです。私が、この「やすらぎ」の「小さな窓から」の「窓」はこの「窓」だったのですね、と問いかけると、「そうよ！」とかすかに微笑する洪谷さんがそこにいた。

大正二年十月二十五日生まれで、昭和の激動期を歩まれ、平成の晩年を体現して、この平成二十年四月二十二日、九十四歳で一生をとじられた現代の妙好人であられた。再度感謝の意を捧げ報恩の謝念を表します。南無阿弥陀仏。合掌。

平成二十年七月十八日記す。

光照寺 住職 池田孝郎

釈光照